

# かさまのれきし

第65回

## 岩間の枕詞について

下郷地内(上町)に鎮座する六所神社境内に「狭隈井之碑」があります。

### 狭隈井之碑(読下し)

衣手の常陸國角障經岩間の里に鎮座す六所神社の御殿。一時甚く破荒いたりしかば、氏人等諸相畏みて語い謀り修め奉りしかども、飽かぬ事ともなほ多かり。然るに適々佐久間壽伯主大前仕奉るの神官に任せたりしより、専ら己か費を奉出して、先朝御食夕御食に仕奉る。御水取るへき神御井を掘りて、大御饌仕奉るに事足はし、廣庭に石甃敷列ねて、神幸の通路を安らかならしめ。傍近く宿直所を造りて守部を置き、常に其内外を衛らしめ、(中略)・然れば其ノ事蹟を後の世まで永く傳へ知らしむべく。其ノ御井の名を狭隈井と負せて、其ノ縁由を斯は石文に掘り誌し侍るになん。

明治四十五年七月 笠間 齋藤敬正書 氏子建之

東京 信田重並撰

狭隈井之碑



とあります。内容は、次のようなものでしょうか。

「二期期荒れていた御殿を氏人らが謀り修めたが、佐久間壽伯が神官を任せられ、専ら自費で朝夕の御食事、御水を得る井戸を掘ったり、守部を置いて守らせたり、蚕の神を祀ったり、いろいろな事を自らの出費で行い、勤しみ功績を遺した。御井の名を「狭隈(佐久間)井」として碑を建てた。」

ところで、碑文のなかに万葉集・風土記などに歌われている枕詞がでてきます。岩間地区では珍しいことなので、取りあげてみました。

「衣手の常陸國」は、「常陸國風土記」では以下のように伝えます。「倭武が、東の夷の國を巡幸、新治の県を通過した時、国造を遣わし、新たに井戸を掘らせたが、流れる泉が清らかに澄み、感動的な美しさであった。その時に、お乗物を止めて、すばらしい水だと誉めて手をお洗いになったところ、御衣の袖が泉に垂れて濡れた。そこで袖をひたすという言葉によって、この國の名とし、衣袖が枕詞となった。」

また、土地の言いならわしに、「筑波岳に黒雲かかり、衣袖漬の國(筑波山に雲がかかる)と雨が降るので着物が濡れる。」というものもあります。

「角障經」については、万葉集巻二・一三五に、「角障經石見の海乃言佐幣久辛乃埼有伊久里尔會深海松生流荒磯尔會玉藻者生流(以下略)」があり、その意は、「角障經石見の海と言さへく辛の埼なる海石にぞ 深海松生ふる荒磯にぞ玉藻は生ふる。」辛の埼歌碑は、柿本人麻呂の歌碑で、鳥根県江津市・浜田市にあります。角の浦、高角山など江津が一望できるところだそうです。

角障經、これを受ける人名・地名は「いは」を共有しているので、「岩」の意を介して続く万葉集中の五つの例がすべて「角障經」を「石」・「岩」の頭に使用していることから、「石」・「岩」につく枕詞で「角障經岩間の里」の角障經は岩間につく、「角障經石見」は、石見につく枕詞であることが分かります。

身近にある碑など、たまたまに覗いたところ、思わぬ発見がありました。

(市史研究員 松本兼房)